

平成24年度 池田家文庫絵図展

# 日本六十余州図 の世界

池田家文庫絵図展「日本六十余州図の世界」 正誤表

頁	誤	正
9頁上段2行目	「拾万石 水野民部」	「拾万千石 水野民部」
10頁下段4行目	「玖佐」(宅佐)	「玖佐」(須佐)
14頁上段2行目	「熊本之城代 長岡佐渡守」	「熊本より之城代 長岡佐渡守」
17頁下段2行目	「宇都宮」	「宇津宮」
18頁上段2行目	新庄と上ノ山には	白石と上ノ山には
18頁上段3行目	「貳拾万石 佐竹修理亮」	「貳拾万石 佐竹修理太夫」
18頁上段3行目	「貳万石 六郷伊勢守」	「貳万石 六郷伊賀守」
19頁下段資料名	池田輝政宛豊臣秀次朱印状	池田輝政宛豊臣秀次黒印状
23頁資料名30番	池田輝政宛豊臣秀次朱印状	池田輝政宛豊臣秀次黒印状

平成24年度 池田家文庫絵図展

# 日本六十余州図の世界

## 会期

平成24年11月10日(土)～11月25日(日)

※前期・後期で一部展示替えを行います。[後期は11月20日(火)から]

## 会場

岡山シティミュージアム 5階展示室

## 主催

岡山大学附属図書館、岡山シティミュージアム

## 後援

岡山県教育委員会 岡山市教育委員会 山陽新聞社 中国新聞備後本社 朝日新聞岡山  
総局 読売新聞岡山支局 毎日新聞岡山支局 産経新聞社 日本経済新聞社岡山支局  
NHK岡山放送局 RSK OHK岡山放送 TSCテレビせとうち KSB瀬戸内海放送  
RNC西日本放送

ごあいさつ

岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムは共同で企画展池田家文庫絵図展「日本六十余州図の世界」を開催いたします。池田家文庫絵図展は岡山大学と岡山市の文化事業協力協定に基づいた事業であり、本年で8回目の開催となります。

この展覧会は、岡山大学附属図書館の所蔵する江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料である池田家文庫を、広く地域社会の皆様にご公開し、親しんでもらいたいという趣旨で企画しております。中でも池田家文庫の特徴のひとつでもある地図資料「絵図」を中心に展示をしています。

江戸幕府開設後初めての試みとして徳川家光により全国に派遣された巡見使は、寛永10年(1633)国絵図を徴収し幕府へ上納しました。この国絵図が幕府で集成され、それを寛文年間(1661～1673)に模写したものが「日本六十余州図」です。

「日本六十余州図」はいくつかの大家に残されていますが、池田家文庫のものは描写・彩色および書写がもともと丁寧で代表的なものになります。また、この絵図に基づいて幕府は日本図も作成しており、「日本六十余州図」とともに、江戸時代前期の国絵図とその作成に関わる資料を通して、当時の人々に映った「日本」の姿を見たいと思います。

この池田家文庫絵図展で、皆様が岡山、ひいては日本の歴史に興味や関心を抱いていただき、池田家文庫を地域の共有の財産だと感じていただければ、大変嬉しく存じます。

平成24年11月10日

岡山大学附属図書館  
館長 神崎 浩

岡山シティミュージアム  
館長 森 隆 恭

## 関連行事 *Event*

### オープニングトーク

日時 平成24年11月10日(土) 午前10時～午前10時30分  
場所 岡山シティミュージアム 5階展示室  
講師 岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授 倉地克直氏

### 記念講演会

「徳川家光と日本」

日時 平成24年11月18日(日) 午後2時～午後4時  
場所 岡山シティミュージアム 4階講義室  
講師 京都大学名誉教授 藤井譲治氏

## 凡例 *Introductory*

- 1 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムが平成24年11月10日(土)～25日(日)まで開催する『企画展 池田家文庫絵図展「日本六十余州図の世界」』の図録である。
- 2 展示番号と本書の図版番号、出展資料目録に印した番号は一致する。また、表記は図版番号、資料名、池田家文庫整理番号、年代、法量(タテ×ヨコ、cm)の順に記した。
- 3 本書に掲載した出展資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山シティミュージアムが撮影した画像である。
- 4 本書の総説・出展資料解説は、岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授 倉地克直が執筆した。編集は岡山大学附属図書館と岡山シティミュージアムで行った。

## 目次 Contents

「日本六十余州図の世界」解説	1
出展資料解説	5
出展資料目録	23
池田家文庫絵図展記録	24

## 「日本六十余州図の世界」解説

岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授 倉地 克直

### 国絵図と家光の巡見使<sup>じゆんけんし</sup>

律令制以来の行政区画である「国」を単位とした絵図のことを「国絵図」という。こうした国絵図が8世紀の聖武天皇や桓武天皇の時代に作られたという記録はあるが、それがどんな図であったかは全く分かっていない。全国から絵図を徴収するには強い権力が必要だ。900年近く後に豊臣秀吉が全国から検地帳と郡絵図を徴収しようとしたが、この事業は完成しなかった。ついで徳川家康が慶長10年(1605)ころに国絵図の徴収を命じたが、やはり全国すべての絵図は集められなかったと思われる。

全国を統合する権力が確立するのは、三代将軍徳川家光の時代である。家光が将軍となったのは元和9年(1623)のことであるが、当時は父の秀忠が大御所として控えていて、その権力と権威に支えられながら、将軍政治が行われていた。その秀忠が寛永9年(1632)に亡くなると、文字通り家光の「御代始め」となった。家光は手始めに熊本藩加藤忠広を改易処分にするとともに、大規模な<sup>てんぽう</sup>転封を行った。そして、寛永10年(1633)1月には大名の領国支配を監察するために、全国に巡見使を派遣した。

巡見使は、全国を6つの地区に分け、6組が派遣された。その人名と担当地区は、〔表1〕〔図1〕のとおりである。巡見使の表向き目的は、「道筋境目」の見分であり、そのために各地で国絵図が徴収された。巡見使によっては、九州のように、地方の図が作成された地区もあった。この絵図は一旦幕府に集められたが、寛永16年(1639)8月11日の江戸城本丸火事によって焼失してしまったという。この前後からの経過を川村博忠の研究によりながら整理すると、次のようになるだろう。

### 巡見使国絵図から「日本六十余州図」へ

巡見使によって集められた国絵図は、担当される地区ごとに様式がバラバラであった。この原本から2つの系統の写本が作られた。1つは、バラバラの様式のままに模写した一次的写本であり、もう1つは、規格・形態・描写などに一定の統一を加えた二次的写本である。このうち少なくとも一次的写本については、模写が行われたのは当然原本焼失以前ということになる。他方、二次的写本は原本から作成することもできるし、一次的写本から作成することも可能である。ただし、幕府が巡見使国絵図から日本総図を作成することを考えると、そのもととなる絵図の様式はある程度統一されていたほうが都合がよい。とすれば、日本総図作成の前提として二次的写本も幕府によって作成されていた可能性が高いだろう。

この2つの系統の写本が、後にいくつかの大名によってそれぞれに模写された。このうち様式の統一された二次的写本の系統の模写本を、川村は「日本六十余州図」と呼んでいる。いわば、三次的写本というべきものだが、これが現在いくつかの大名家にまとまって残されている。例えば秋田藩佐竹家、萩藩毛利家、高知藩山内家などであり、池田家文庫にも尾張と播磨を除く66か国分が伝わっている。これら諸家本のうちでは、池田家本の模写年代が他に先行すると川村は推定している。

池田家本の「六十余州図」には、各地の居城に城主名と知行高を記した付箋が貼られている。その在城期間を調べてみると、一致するのは寛文11年(1671)だという。絵図が模写された時期と付箋が貼られた時期とは大きく隔たらないと思われるから、池田家本の模写年代は寛文11年(1671)頃と考えてよいのではないだろうか。この頃には、統一基準で作成された詳細な正保国絵図が作成されているから、寛永巡見使国絵図は完全に用済みになっており、その模写を規制する必要は幕府にはなかったと考えられる。

なお、先にも述べたように、川村は巡見使国絵図に基づいて日本総図(いわゆる寛永日本図A型)が幕府によって作成されたと推定している。その際に依拠されたのは規格が統一された二次的写本の方であったと考えるのが自然だろう。

## 巡見使国絵図の修正

寛永15年(1638)になって幕府は、中国筋の大名に対して、先年巡見使に出された国絵図は粗略であるので、改めて国絵図を提出するように求めた。その理由を川村は、次のように推定している。

前年寛永14年(1637)10月に島原・天草一揆が起こっている。幕府は九州の大名を急遽帰国させてその軍兵を動員するとともに、江戸から何度も上使<sup>じょうし</sup>を派遣して鎮圧にあたった。この過程で幕府は、特に西国での海上・陸上交通について正確な情報を得る必要を痛感した。そのため中国筋について、一揆後に改めてその点に配慮した国絵図の修正を求めたというのである。そして、その修正された国絵図に基づいて日本図も作り替えられた。この日本図(いわゆる寛永日本図B型)は、先のものに比べて交通情報を重視した軍事目的の実用図だと川村は特徴付けている。

この寛永15年国絵図は、豊後白杵藩<sup>ぶんごうすきはん</sup>稲葉家に写本がまとまって伝来している。岡山藩も修正した国絵図を提出したと考えられる。池田家文庫には、この寛永15年国絵図に基づいて藩独自に作成されたとと思われる「備前国九郡絵図」と「備中国絵図」とが残されている。また、寛永日本図B型とされる「日本大絵図」も残されている。当時の藩主である池田光政は島原・天草一揆に強い関心を持って臨んでいた。池田家文庫に残された寛永期の一連の絵図類は、光政のそうした関心を反映したものかもしれない。

## 「日本六十余州図」の特徴

絵図の様式から見て、「六十余州図」は次のような特徴を持っている。

- 方位は四方内向きで、図形は概ね海側から山側を見る方向で描かれる。
- 図の中央に黒枠・黄色塗りの長方形を置き、なかに国名が記されている。
- 郡境線は柿色で、郡名は黒枠・朱塗りの長方形のなかに記される。ただし、関東・東海・東山・奥羽・九州の諸国では郡分けがなされず、郡名も図中には記されない。
- 村は小判形で示され、中に村名が記されるが、「村」の文字は略され、村高などの記載もない。村の記載も道沿いの主なものが描かれるだけで、特に郡分けのされない諸国では極端に少ない。
- 道は細い朱線で引かれ、大道と間道の区別はなく、一里塚や里程なども記されない。渡河地点での渡河方法の記載がないものが多い。海上航路の線引があるのは九州の肥前・薩摩・大隅・壹岐・対馬のみで、他にはない。
- 国境は山形で示される。ただし九州などでは山形の外にさらに朱線で国境が引かれることがある。道筋が国境を越えるところでは、朱線を引き捨ててにして、隣国のどこに至るかを注記する。全体として交通情報が乏しいなかで、境目記載の多さが特徴的だ。
- 居城は□で示し、なかに城名を記す。古城は居城よりやや小さめの四角で示し、なかに「何々古城」もしくはただ「古城」とのみ記す。郡や村に比して居城・古城が重視されるのも、巡見使国絵図の特徴である。居城の付箋は佐竹家本・毛利家本にはない。
- 黒枠・朱塗りの丸形のなかに「御殿」「御茶や」「御番所」と書かれた符号が記されている。江戸と京都および日光とを往来する際に将軍が休泊する施設を示すものだ。家光の上洛と日光参詣に備えた絵図情報である。
- 罫紙部分には、一国の郡数と石高が記され、郡名を書き上げる。郡名については『節用集』や幕府儒官の林春斎(鷲峯)による校訂を記す。これも池田家本のみに見られる特徴である。

「日本六十余州図」は江戸時代初期の全国を網羅する唯一の国絵図であり、同時期の日本図とともに、当時の人びとがみた日本の姿をうかがうことのできる貴重な資料である。なかでも池田家本は描法・彩色などが最も丁寧で、「日本六十余州図」の代表とってよいものである。

### 〔参考文献〕

川村博忠編『寛永十年巡見使国絵図 日本六十余州図』柏書房、2002年

川村博忠『江戸幕府の日本地図』吉川弘文館、2010年

国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房、2005年

藤井譲治『徳川家光』吉川弘文館、1997年

表1、図1

表2 寛永10年巡見使の分担区域割

分担区域	上使	担当国
五畿・南海	正使 溝口伊豆守善勝 (1.4万石、八千石役) 副使 川勝丹波守広綱 (使番) 同 牧野織部成常 (書院番)	山城 大和 河内 和泉 摂津 伊賀 伊勢 志摩 紀伊 淡路 阿波 讃岐 伊予 土佐
関東	正使 小出大隅守三尹 (1万石、七千石役) 副使 永井監物白元 (使番) 同 桑山内匠貞利 (書院番)	尾張 参河 近江 駿河 伊豆 甲斐 相模 武蔵 安房 上総 下総 美濃 飛騨 信濃 上野 下野
九州	正使 小出対馬守吉親 (2.9万石、半役) 副使 城織部佑信茂 (使番) 同 能勢小十郎頼隆 (書院番)	筑前 筑後 豊前 豊後 肥前 肥後 日向 大隅 薩摩 杵岐 対馬
中国	正使 市橋伊豆守長政 (1.8万石、半役) 副使 柘植三四郎正時 (使番) 同 村越七郎左衛門正重 (小姓組番)	但馬 因幡 伯耆 出雲 石見 隠岐 播磨 美作 備前 備中 備後 安芸 周防 長門
奥羽・松前	正使 分部左京亮光信 (2万石、半役) 副使 大河内平十郎正勝 (使番) 同 松田善右衛門勝政 (書院番)	陸奥 出羽 常陸 松前
北国	正使 桑山左衛門佐一直 (1.6万石、八千石役) 副使 徳山五兵衛直政 (使番) 同 林丹波守勝正 (書院番)	丹波 丹後 若狭 近江 越前 加賀 能登 越中 越後 佐渡

注) 分担区域の名称は『徳川実紀』、上使は『酒井家日記』、国割は藤井譲治『江戸開幕』(集英社版日本の歴史12)の図133を参照した。

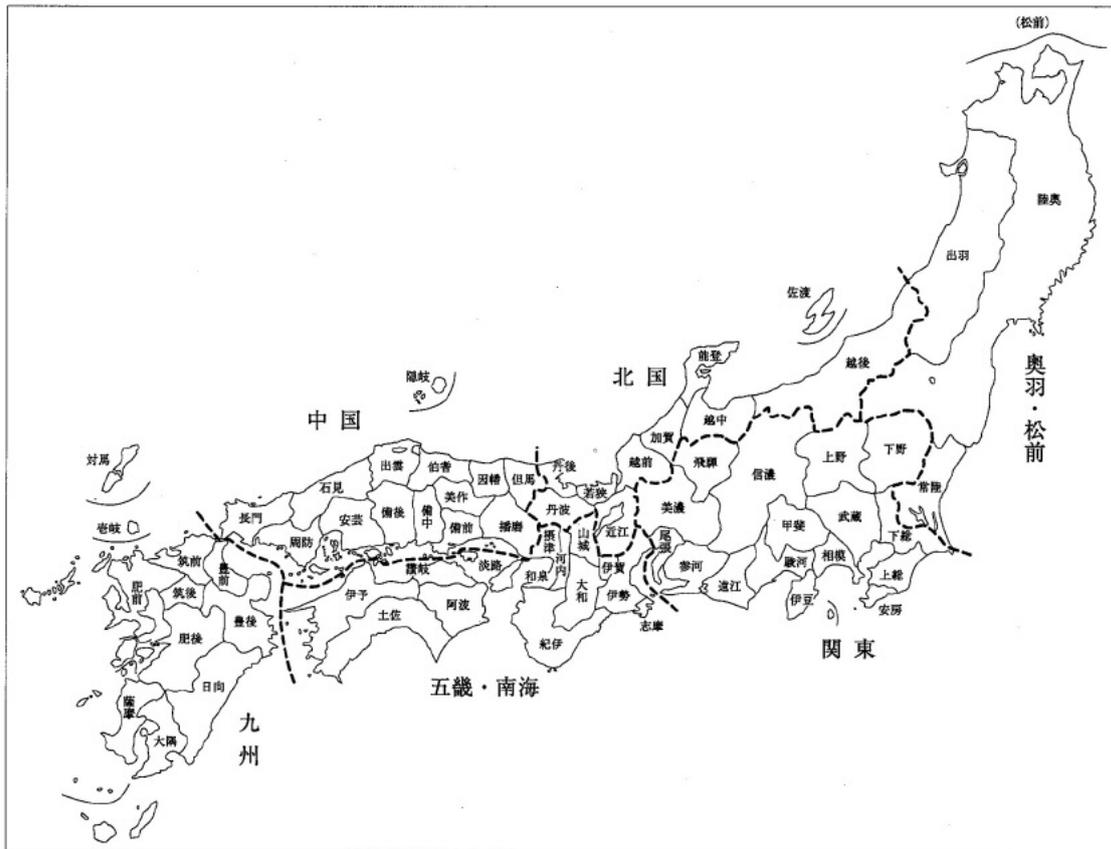


図7 寛永10年巡見使の分担区域割 (表2と対応)

『寛永十年巡見使国絵図 日本六十余州図』(柏書房 2002年) 川村博忠「解説」より転載。



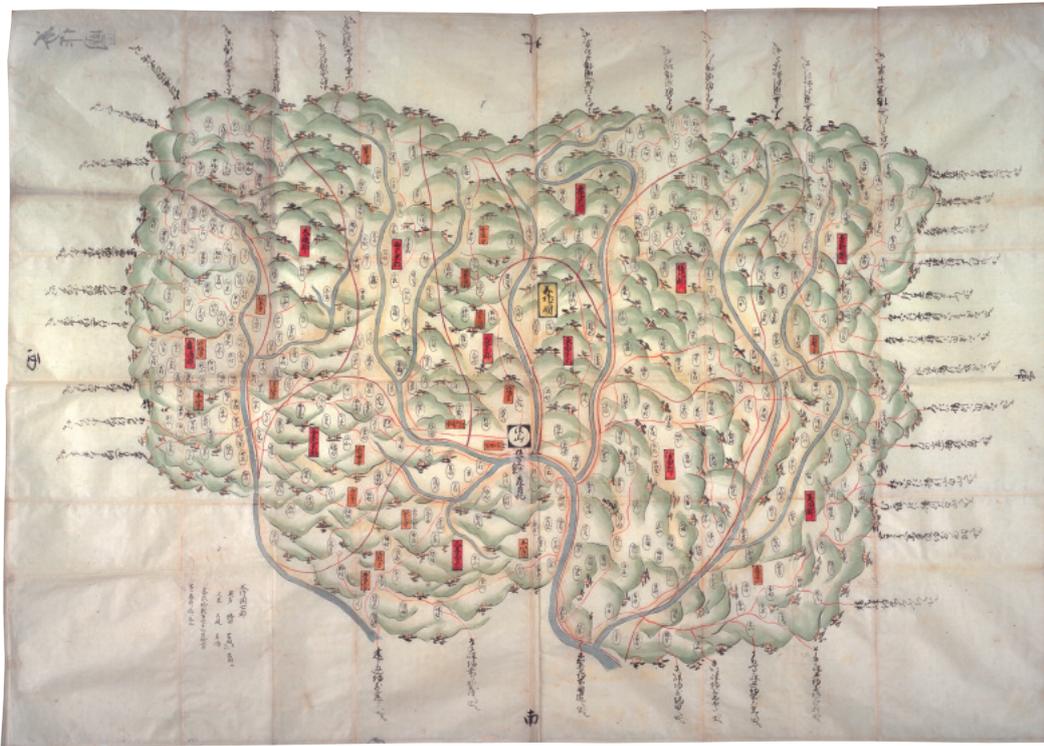
びぜんこくず  
1 備前国図 T1-61 113.9cm×159.5cm

山形は南(海)から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。ただし、児島の北側は北(海)から見た方向になっている。児島湾を船が航行したなごりだろう。居城は「岡山」、貼紙に「三拾壹万五千石 松平新太郎」とある。「たけへ町」「金川町」「すさい町」「虫明」に、それぞれ「土倉淡路在所」「日置若狭在所」「池田大学在所」「伊木長門在所」と書き込まれている。郡境線が引かれ郡名も記される。「上東郡」には「此郡異本ニ不見」とあるが、上東郡が上道郡に合併されるのは寛文4年(1664)である。村形以外では、「一ノ宮」(吉備津彦神社)「八東寺」(八塔寺)「観音」(観音院か)が見える。畠紙右下に、郡数・国惣高・郡名考証が記されている。誤認・誤記も少なくなく、直接模写した人物が岡山藩の事情に精通していたとは考えにくい。



びちゆうこくず  
2 備中国図 T1-86 117.2cm×164.1cm

文字は西から東を見る方向に書かれているが、山形は南(海)から北を見た方向で描かれている。居城は「松山」、貼紙に「五万石 水谷左京」と記されている。三方の国境および郡境が朱線で引かれ、郡名が記される。村名以外では、「天神山」「成羽」「吉備津宮」「庭瀬」が示される。足守は村形に「足守町」とあるだけで、特別な符号表記にはなっていない。畠紙右下に郡数・国惣高・郡名考証が記されている。



3 <sup>みまきこくず</sup> 美作国図 T1-94 116.7cm×164.1cm

文字は南から北を見た方向で書かれるが、山形は川筋を中心に左右を見る形で描かれるところもあり全体として一様ではない。居城は「津山」、貼紙には「拾八万六千五百石 森内記」とある。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外に多数の寺社があげられており、「誕生寺」には「法然上人出生」と書き込まれている。畠紙左下に郡数・郡名・国惣高・郡名考証を記している。



4 <sup>いなぼこくず</sup> 因幡国図 T1-103 116.1cm×159.4cm

山形は西から東を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。居城は「鳥取」、貼紙に「三拾貳万石 松平相模守」とある。郡境線が引かれ郡名も記される。村形以外では、「磨良山」(摩尼山)「鷲峯山」が見える。畠紙左下に、郡数・国惣高・郡名考証が記されている。



5 伯耆国図 T1-104 116.8cm×163.7cm

山形は北(海)から南を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。居城は「米子城」、はずれた付箋が近くに貼られていて「松平相模守城代 荒尾志摩」と記されている。郡境線が引かれ郡名も記される。村形以外では、「湯閑」「大山」「なへ山」「のミせん」「かわら山」が朱塗り長方形の枠に書かれる。畠紙中央手前に、郡数・国惣高のみが記されている。



6 出雲国図 T1-105 117.3cm×165.3cm ■前期:11月10日(土)~18日(日)のみ

文字は基本的に北(海)から南を見た方向に書かれるが、山形は宍道湖から西を向き正面・左右を見た方向に描かれる。居城は「末次」(松江)、城主の貼紙はない。郡境線が引かれ郡名も記される。「大社」をはじめ多数の寺社が書かれている。畠紙左上に、郡数・国惣高・郡名考証が記される。



7 <sup>いわみこくず</sup> 石見国図 T1-106 117.3cm×163.4cm □後期:11月20日(火)~25日(日)のみ

山形は北(海)から南を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。居城は「浜田」と「津和野」で、それぞれ「五万石 松平周防守」「四万三千四百石 亀井能登守」と記した貼紙がある。郡境線が引かれ郡名が記される。「久喜」「大林」「銅ノ丸」「御銀蔵」など石見銀山関連の地名が目につく。畠紙中央手前に、郡数・国惣高が記されている。



8 <sup>おきこくず</sup> 隠岐国図 T1-77 78.5cm×109.8cm

文字は西から東を見る方向に書かれているが、山形は南から北を見た方向で描かれている。居城の符号はないが、「後鳥羽院御旧跡」「文覚上人旧跡」をはじめ寺社の符号はいくつもある。郡境線が引かれ郡名が記される。畠紙やや右上に郡数・国惣高を記し、中央には承久の乱によって後鳥羽院が配流された由来を記す。



びんごこくず  
**9 備後国図** T1-96 118.4cm×164.8cm

山形は南（海）から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれている。居城は「福山」と「三原」、それぞれ貼紙に「拾万石 水野民部」「松平安芸守」とある。安芸との国境および郡境が朱線で引かれ、郡名が記される。村名以外に地名では、「あふと」（阿伏兎）が示される。罫紙左下に郡数・国惣高・郡名・郡名考証を記している。



あきこくず  
**10 安芸国図** T1-97 117.2cm×164.3cm

山形は南（海）から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれている。ただし「宮島」は対岸の「地御前」から見た形になっている。居城は「広島」、貼紙に「三拾七万六千五百石 松平」とある。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外に地名では、広島周辺に「宮有」2か所、「新山」「明光院」「仏通寺」がある。罫紙右上に郡数・郡名・郡名考証・国惣高を記している。



す おう こ く ず  
**11 周防国図** T1-99 117.9cm×165.1cm □後期：11月20日(火)～25日(日)のみ

山形は南(海)から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれている。古城として「岩国」「松崎」「下松」「山田」が示されるが、居城はなく貼紙もない。国境および郡境が朱線で引かれ、郡名が記される。村名以外に地名の記載はないが、大島周辺の島名が比較的良好に拾われている。畠紙左下に郡数・国惣高を記している。



な が と こ く ず  
**12 長門国図** T1-98 117.2cm×163.5cm ■前期：11月10日(土)～18日(日)のみ

山形は南から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。居城は「萩」、貼紙に「三十六万九千四百石 松平大膳大夫」とある。「五万石 毛利甲斐守」と記したはずれた貼紙があるが、本来は「府中古城」(長府)に貼ってあったものだろう。周防との国境および郡境が朱線で引かれ、郡名が記される。村名以外では、「玖佐」(宅佐)「生雲」が記される。畠紙左下に郡数・郡名・国惣高を記す。



あわこくず  
13 阿波国図 T1-89 79.0cm×106.7cm

文字は東から西を見た方向に書かれるが、山形は海か川筋から見た方向で描かれている。居城は「徳島」、貼紙はない。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外では、古城の符号があるくらいで、全体に簡潔な表示にとどまっている。罫紙左下に郡数・郡名・国惣高を記す。



さぬきこくず  
14 讃岐国図 T1-88 77.6cm×106.4cm

山形は北(海)から南を見る方向で描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれるが、国名だけが逆になっている。居城は「高松」、貼紙に「六万石 京極百助」とある。丸亀は村形に「円亀」と書かれ古城の符号がある。丸亀城は元和元年(1615)に廃城になり、寛永18年(1641)に山崎家治によって再建される。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外に、「金毘郎」(金毘羅)など寺社の表示がある。罫紙右下に郡数・郡名・郡名考証・国惣高を記す。



15 伊予国図 T1-101 115.7cm×163.9cm

山形は北と西の海から見た方向で描かれ、文字も基本的に同じ方向で書かれている。居城は、「今治」「松山」「大洲」「宇和島」が示されるが、貼紙が残るのは今治「六万石 加藤出羽守」と宇和島「七万石 伊達遠江守」のみ。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外に特に目立つ表示はない。畠紙右上に郡数・郡名考証・国惣高を記す。



16 土佐国図 T1-100 78.2cm×108.5cm

山形は南(海)から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれている。居城は「高知山」、貼紙はない。古城として「本山」「浦戸」「佐川」「窪川」「中村」「宿毛」が示され、枠外に本山「孕石頼母」、浦戸「長曾我部代々居城」、窪川「山内右近」、中村(貼紙)「山内右近」、宿毛「山内左衛門佐」と書き込まれている。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外では、「東寺」「津寺」「西寺」「汲江寺」「足摺」などが示される。畠紙右下に郡数・国惣高・郡名考証を記している。



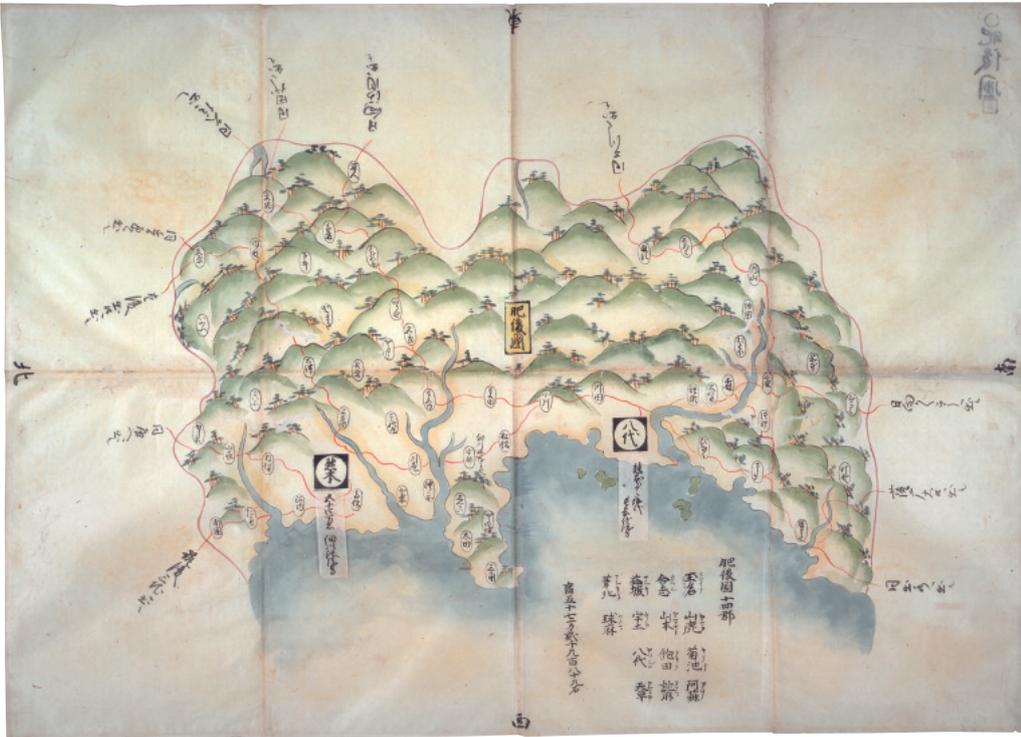
17 筑前国図 T1-90 78.9cm×109.8cm

山形は北（海）から南を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向に書かれている。居城は「福岡」「秋月」、貼紙にはそれぞれ「四十三万三千四百石 松平右衛門佐」「五万石 黒田千之助」とある。国境線が朱で引かれるが、郡境・郡名はない。古城もない。村形も少なく、全体としてごく簡単な表示である。畠紙右下に郡数・郡名・郡名考証・国惣高を記している。



18 肥前国図 T1-110 77.6cm×107.9cm

文字は東から西を見た方向で書かれるが、山形は基本的に海から見た方向で描かれている。居城は「唐津」「龍造寺」「大村」「島原」、貼紙にはそれぞれ「八万三千百石 大久保出羽守」「三十五万七千石 松平丹波守」「貳万七千九百石 大村因幡守」「松平主殿頭」とある。国境線が朱で引かれるが、郡境・郡名はない。航路が朱線で引かれる。肥後国の天草島が描かれているのは慶長国絵図と同じである。天草は寛永15年(1638)に島原・天草一揆が終わるまでは、唐津藩寺沢氏の領地であった。畠紙左上に郡数・郡名・郡名考証・国惣高を記している。



ひごこくず  
19 肥後国図 T1-111 78.5cm×109.4cm

山形は西(海)から東を見た方向に描かれ、文字も同じ方向で書かれている。居城は「熊本」と「八代」で、貼紙にはそれぞれ「五十四万石 細川肥後守」「熊本之城代 長岡佐渡守」とある。国境線が朱で引かれるが、郡境・郡名はない。畠紙中央やや右よりに郡数・郡名・国惣高が記されており、「天草」もあげられているが、図中に天草島は描かれていない。



やましりこくず  
20 山城国図 T1-80 116.5cm×164.5cm

山形は都から四方を見るように描かれており、文字も四方から書かれている。朱丸に「禁中」と記され、居城は「二条」と「淀」。淀に「六万石 石川主殿頭」と記した貼紙がある。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外では、「伏見町」「伏見古城」が目立つ。各地の寺社も多数示されている。畠紙右上に郡数・国惣高を記す。



21 <sup>きいこくず</sup> 紀伊国図 T1-107 78.6cm×109.6cm

山形は基本的に南か東の海から見る方向で描かれているが、文字は四方から書かれている。居城は「和歌山」「田辺」「新宮」が示されるが、貼紙は新宮の「御城代 水野対馬守」と記されたもののみである。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外にも、「高野山」「紀三井寺」「那智」など有名な寺社が示されるが、なかに和歌浦の「東照権現」があり注目される。畚紙左下に郡数・国惣高を記す。



22 <sup>おうみこくず</sup> 近江国図 T1-66 117.4cm×160.1cm

山形は中央の琵琶湖から四方を見るように描かれているが、文字は基本的に西から東を見る方向で書かれている。居城は「彦根」と「膳所」で、貼紙はそれぞれ「三十万石 井伊掃部」「七万石 本田兵部」と記されている。郡境線が引かれ郡名が記される。村名以外にも、朱丸の「御殿」が3か所、他に多くの寺社が示されている。畚紙左下に郡数・郡数考証・郡名・国惣高を記す。



えちぜんこくず  
23 越前国図 T1-63 77.9cm×108.4cm

山形は海と川筋から見る方向で描かれているが、文字は基本的に西から東を見る方向で書かれている。居城は「丸岡」「福居」「大野」で、貼紙はそれぞれ「四万六千貳百石 本田飛驒守」「四拾五千石 松平越前守」「五万石 松平但馬守」と記されている。福井の付箋には脱字があり、実際は「四拾七万五千石」。「城」と書かれた居城の符号は、「府中」(武生)のこと。勝山は古城と同じ符号で「城」と記されている。「白山」が他の山とは区別された霊山表現になっており、目を引く。寺社の表記も各地にある。郡境線が引かれ郡名が記される。罫紙左下に郡数・郡名・国惣高・郡数考証を記す。



みかわこくず  
24 三河国図 T1-48 108.2cm×77.8cm

山形は南(海)から北を見た方向に描かれ、文字も基本的に同じ方向。本来は北を天に見るのだろう。居城は「吉田」「田原」「岡崎」「西尾」「荻屋」で、貼紙にはそれぞれ「四万五千石 小笠原山城守」「壺万貳千石 三宅能登守」「五万五千石 水野監物」「貳万三千石 土井兵庫」とあり、荻屋には付箋がない。朱丸の「御殿」と「御茶や」が1か所ずつ。郡境線・郡名はない。罫紙右下に郡数・郡名・国惣高が記され、異筆で里程の書付もある。



25 <sup>あわこくず</sup>安房国図 T1-74 107.0cm×78.5cm

山形は三方の海から見た方向に描かれ、文字は基本的に南から北を見た方向に書かれる。本来北を天に見るべきか。古城は「館山」など3か所見えるが、居城はない。半島先端近くに、朱丸の「御番所」が2か所ある。国境が細い墨線で引かれるが、郡境線・郡名はない。村形の数も少なく、簡単な内容である。畠紙左下に郡数・郡名・国惣高が記される。



26 <sup>しもつけこくず</sup>下野国図 T1-70 108.2cm×78.3cm

山形は川筋から見た方向に描かれ、文字は基本的に南から北を見た方向に書かれている。本来北を天に見るべきか。ただし国名は西向きである。居城は「壬生」「宇都宮」「烏山」「大田原」で、それぞれ貼紙に「式万五千石 三浦志摩守」「拾五万石 松平下総守」「板倉内膳正」「壹万貳千石 大田原山城守」と記されている。橙色に塗られた四角で「日光山」「高原山」「なす山」「矢みそ山峠」が示され、朱丸で「御茶や」3か所、「御殿」1か所が示される。「ゆふき」(結城)は赤・白・黒の3色に塗り分けられ、「赤ハ下野、白ハ武蔵、黒ハ常陸」と注記されている。国境線・郡境線はなく郡名もない。村形の数も少ないが、「古城」は11か所もあり目立っている。畠紙左上に郡数・郡名・郡名考証・国惣高が記される。



27 出羽国図 T1-108 119.2cm×163.9cm

山形は海か川筋から見た方向に描かれ、文字は基本的に西から東を見た方向に書かれている。居城は「窪田」「本城」「鶴岡」「白石」「新庄」「山形」「上ノ山」で、新庄と上ノ山には貼紙がない。貼紙に記された文字は、窪田「貳拾万石 佐竹修理亮」、本城「貳万石 六郷伊勢守」、鶴岡「拾四万石 酒井左衛門」、新庄「六万八千貳百石 水沢能登」、山形「九万石 奥平」である。「米沢」と米沢藩領分はこの出羽国図に含まれず、「陸奥国図」の方に描かれている。□で陣屋町を示し、「大館」「角館」「横手」「亀ヶ崎」「延沢」「東根」があげられている。霊山として「鳥海山」「三崎山」「羽黒山」「月山」「湯殿山」「金宝山」が示され、他に「金山」「銀山」が6か所あげられている。郡境線はなく郡名もない。畠紙右下に郡数・郡名・郡名考証・国惣高が記される。



28 備前国九郡絵図

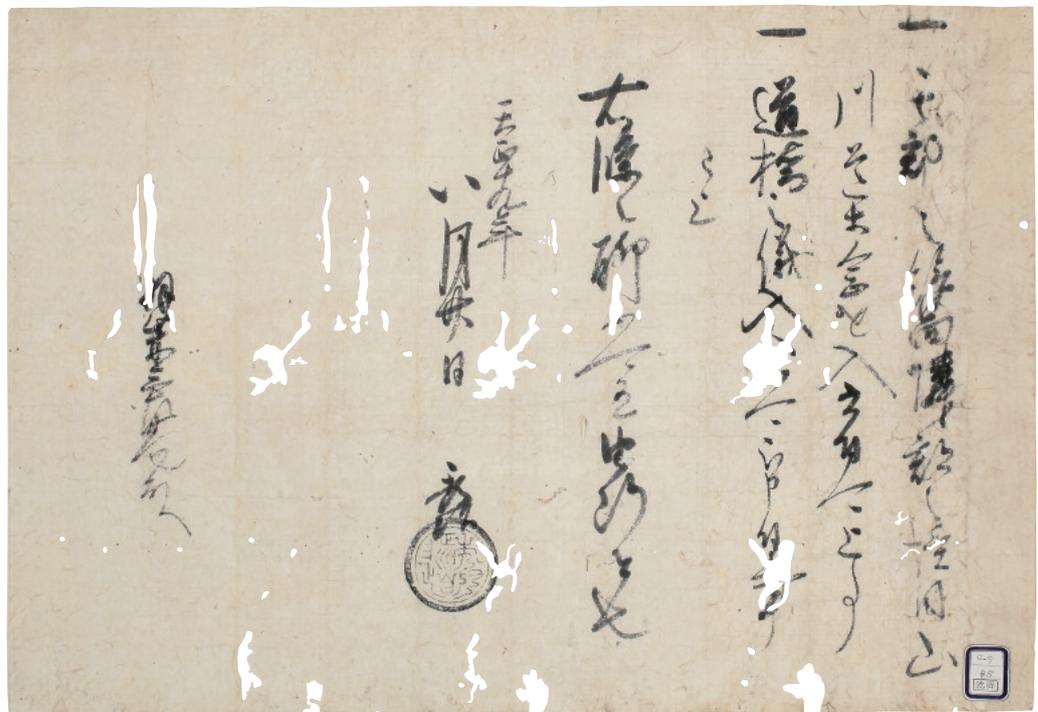
T1-14 寛永年間 (1624-1644)  
193.4cm×188.5cm

29 備中国絵図と一对の絵図。巡見使絵図（1 備前国図の元図）の改訂を求められたのに応じて岡山藩から提出された絵図に基づいて制作された絵図。記された内容や形式は後の正保国絵図に通じる所が多いが、金泥や顔料を使った鮮やかな彩色、古色に富んだ表現など、独特の個性を持った絵図である。岡山城は白地に「岡山居城」と書かれ、5層の天守閣と櫓1棟が描かれる。備前一宮も絵画的に表現されている。畠紙右上に国惣高と3か条の凡例が記されている。

びつちゅうのくに え ず  
29 備中国絵図

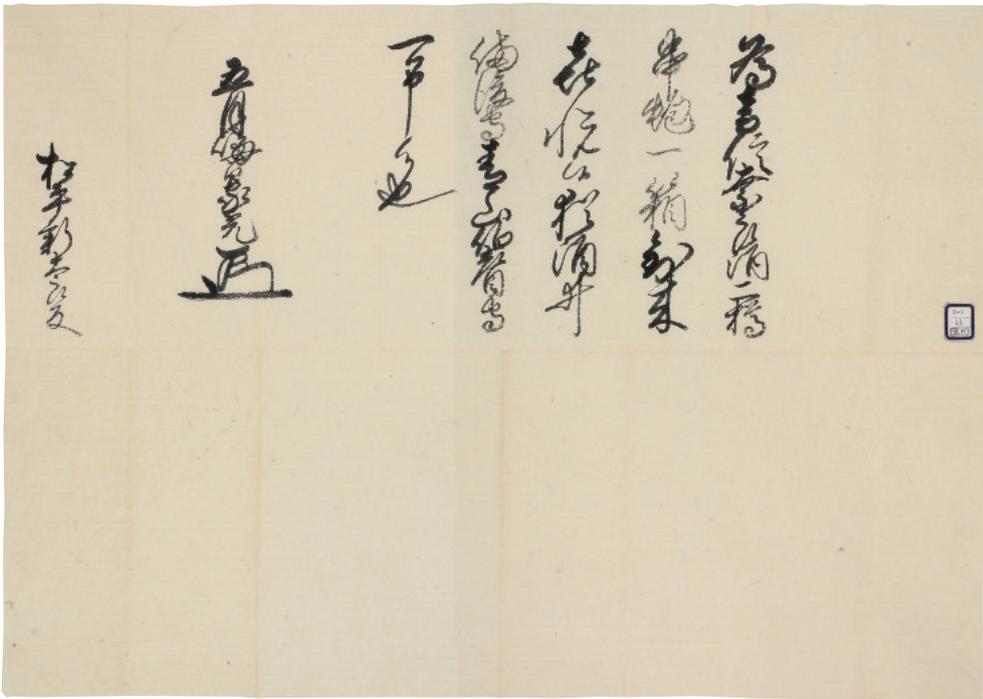
T1-30 寛永年間 (1624-1644)  
190.0cm×189.2cm

28 備前国九郡絵図と一对の絵図。巡見使絵図(2 備中国図の元図)の改訂を求められたのに応じて岡山藩から提出された絵図に基づいて制作された絵図。畠紙左に国惣高および領主名と知行高が記されており、その内容から寛永15年(1638)頃に作られたものと考えられる。連島・乙島・柏島・七島などは海上に浮かぶ島として描かれており、松山藩および成羽藩の外港的な位置にあった倉敷村と連島には、それぞれ松山・成羽からの里程が記されている。備中松山城と吉備津宮が絵画的に表現される。畠紙右上には7か条の凡例が記される。



いけだてるまさあてとよとみひでつぐしゆいんじょう  
30 池田輝政宛豊臣秀次朱印状 C9-45 天正19年(1591)8月20日 32.8cm×47.2cm

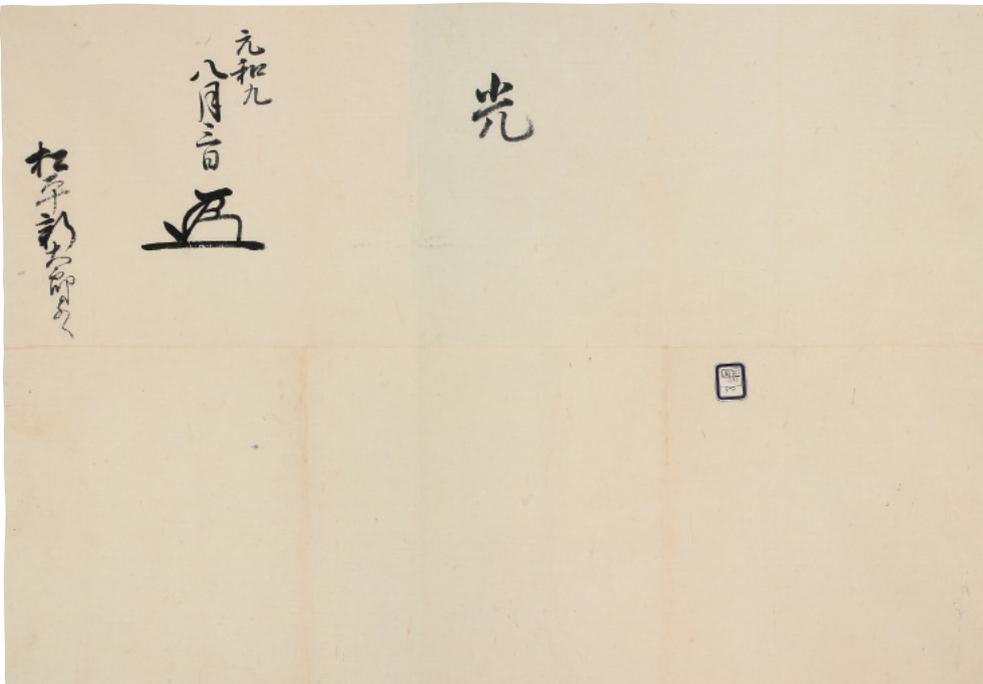
奥州を平定して全国統一を果たした秀吉は、天正19年(1591)7月に諸国に検地帳と郡絵図の提出を求めた。羽柴三左衛門は池田輝政のこと。秀次が関白になるのは同年12月。輝政は、家康が関東8か国に転封になったのにもない、岐阜から三河の吉田(現豊橋)に移り、15万石を領していた。この文書は前半部分が欠けており、輝政が何国の国絵図作成を命じられたかは確定できない。



いけだ みつ まさ あて とく がわ い え み つ ご ない し ょ  
**31 池田光政宛徳川家光御内書**

C9-44 [元和9年(1623)か] 5月晦日 46.8cm×65.4cm

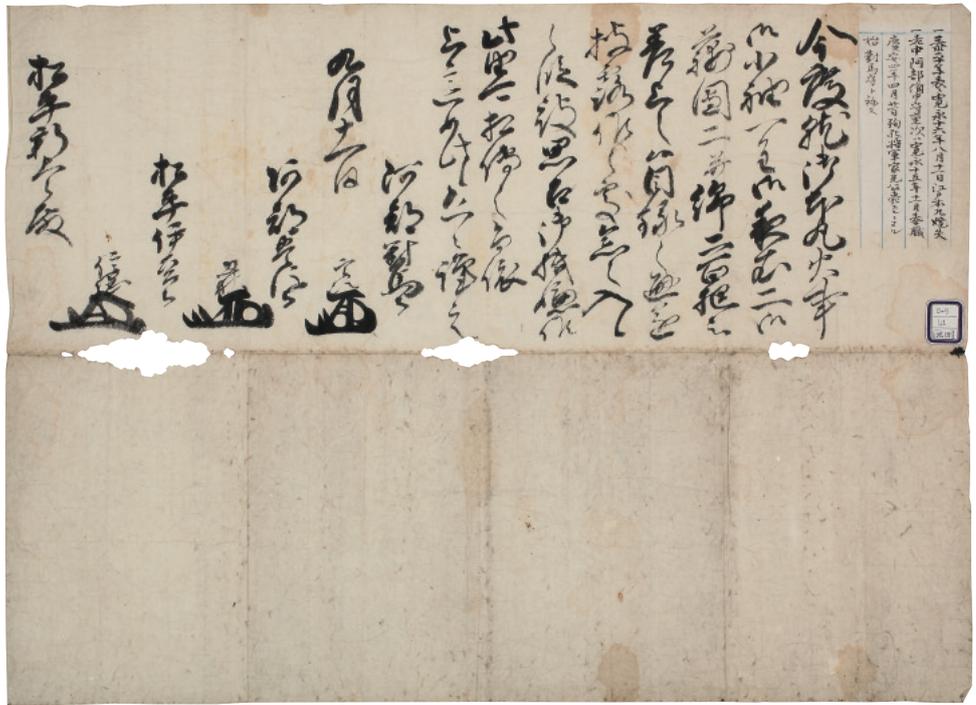
御機嫌伺いの進物に対する家光からの礼状。「松平新太郎」は光政のこと。酒井備後守忠利・青山伯耆守忠俊は、幕府の年寄衆(老中)。青山の在任期間から、元和9年(1623)の家光將軍宣下のときのものではないかと推定される。この年家光は將軍宣下のため5月27日に江戸を出発する予定であったが、体調不良のため延期となった。そのお見舞いの進物と思われる。



とく がわ い え み つ い ち じ か き だ し じ ょ う  
**32 徳川家光一字書出状**

C6-317 元和9年(1623)8月3日 46.5cm×66.4cm

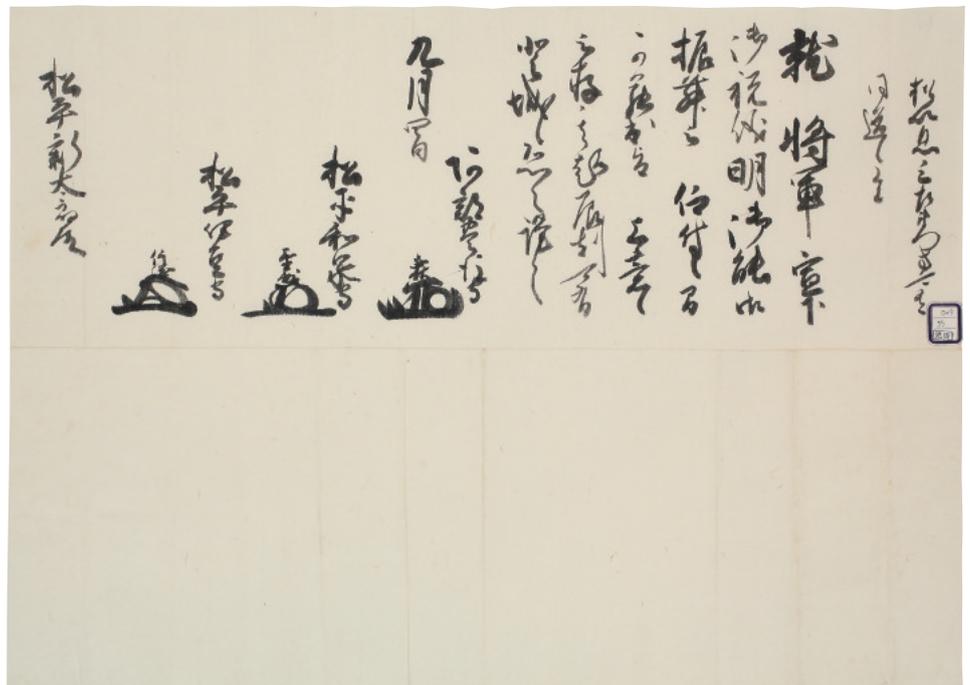
7月27日に將軍宣下を受けた家光が、光政に対して「光」の字を偏諱として与えた書出状。これにより、それまでの幸隆を「光政」と改めた。8月6日家光の参内に光政も供奉、この日に従四位下侍従に叙任されている。この前年には、天樹院(千姫)の娘である勝子(円盛院)との婚約も決まっていた。



33 池田光政宛江戸幕府老中連署奉書

C9-41 [寛永16年(1639)] 9月11日 39.6cm×54.8cm

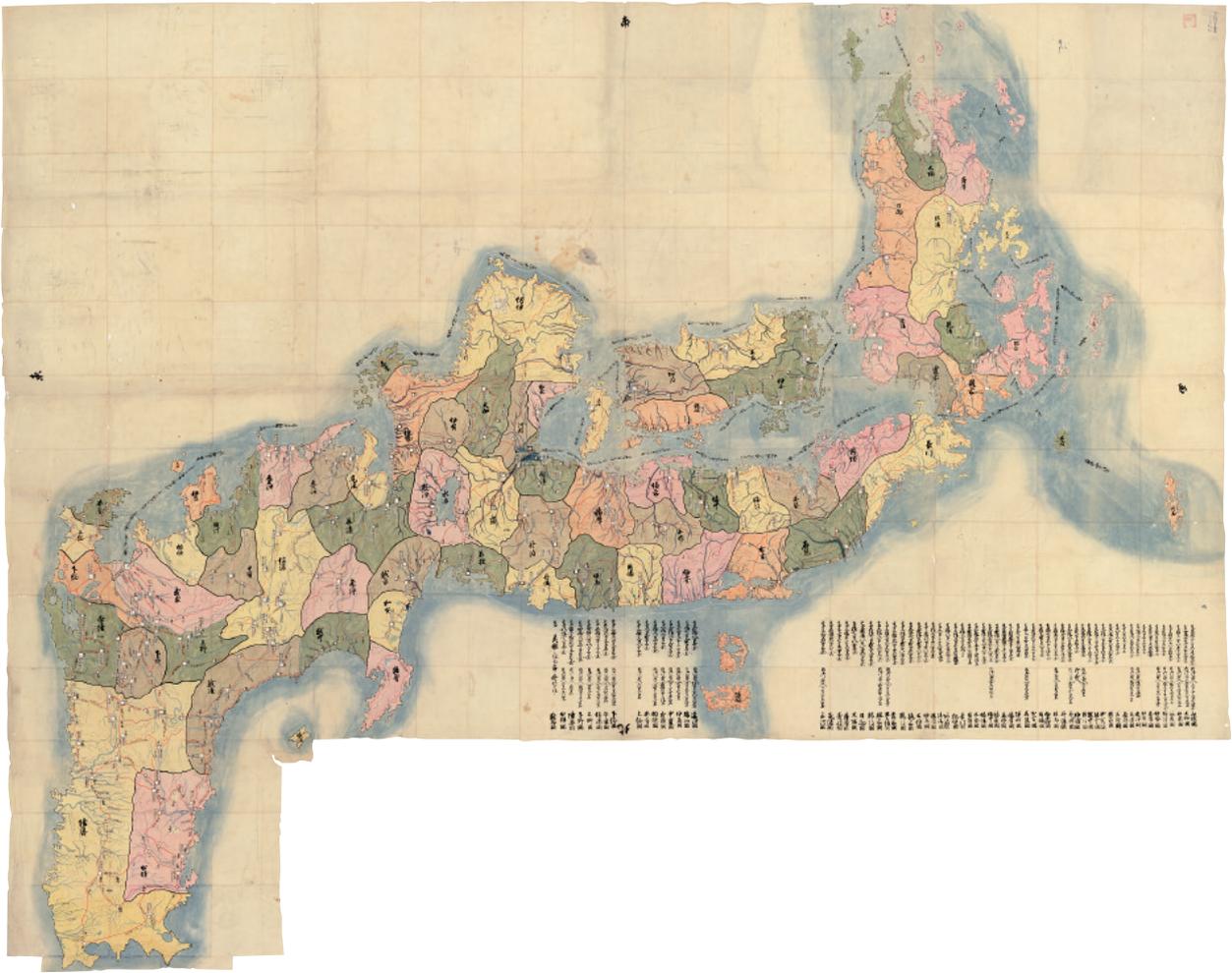
寛永16年(1639)8月11日に起きた江戸城本丸火事の見舞いとして、光政が小袖などを贈ったのに対する家光の謝意を、老中が伝えた書状。阿部重次・阿部忠秋・松平信綱は、家光の年寄衆(老中)。この火事によって巡見使国絵図(「日本六十余州図」の原図)は焼失したと考えられている。



34 池田光政宛江戸幕府老中連署奉書

C9-35 [慶安4年(1651)] 9月4日 40.8cm×56.3cm

家光は慶安4年(1651)4月21日に亡くなる。子の家綱が8月18日江戸城で將軍宣下を受けた。その祝儀として江戸城で能が演じられることになり、それに光政を招待する上意を伝える老中奉書。阿部忠秋・松平乘寿・松平信綱は老中。嫡男の三左衛門(後の綱政)も同道するよう伝えられている。



〔参考〕 <sup>にほんだいえず</sup> 日本大絵図

T10-4 360.5cm×456.0cm

川村博忠によって、巡見使国絵図を基に作られた日本総図（寛永日本図A型）を寛永15年絵図に基づいて修正した日本総図（寛永日本図B型）と推定されている。また川村は、島原半島の地名が他と比べて異常に詳しい点に、寛永15年（1638）の島原・天草一揆後の政治状況を見ている。城地は□、その他の地名は○、道路は朱線、海路は白線で示される。里数や渡河情報も細かく記される。畚紙部分には国ごとの石高とそのうちの蔵入地（幕府領）の高を記す。各地の居城に貼られた付箋には、城主名と知行高が記されており、その年代はほぼ正保元年（1644）から同2年（1645）に集約されるという。この図が写されたのもほぼその頃と考えてよいだろう。国名をはじめ図中の文字は北から南を見た方向に書かれており、畚紙の文字や貼紙も同じ方向である。

番号	資料名	員数	年代	法量(cm)	整理番号
1	備前国図	1 鋪	未詳	113.9×159.5	T1-61
2	備中国図	1 鋪	未詳	117.2×164.1	T1-86
3	美作国図	1 鋪	未詳	116.7×164.1	T1-94
4	因幡国図	1 鋪	未詳	116.1×159.4	T1-103
5	伯耆国図	1 鋪	未詳	116.8×163.7	T1-104
■ 6	出雲国図	1 鋪	未詳	117.3×165.3	T1-105
□ 7	石見国図	1 鋪	未詳	117.3×163.4	T1-106
8	隠岐国図	1 鋪	未詳	78.5×109.8	T1-77
9	備後国図	1 鋪	未詳	118.4×164.8	T1-96
10	安芸国図	1 鋪	未詳	117.2×164.3	T1-97
□ 11	周防国図	1 鋪	未詳	117.9×165.1	T1-99
■ 12	長門国図	1 鋪	未詳	117.2×163.5	T1-98
13	阿波国図	1 鋪	未詳	79.0×106.7	T1-89
14	讃岐国図	1 鋪	未詳	77.6×106.4	T1-88
15	伊予国図	1 鋪	未詳	115.7×163.9	T1-101
16	土佐国図	1 鋪	未詳	78.2×108.5	T1-100
17	筑前国図	1 鋪	未詳	78.9×109.8	T1-90
18	肥前国図	1 鋪	未詳	77.6×107.9	T1-110
19	肥後国図	1 鋪	未詳	78.5×109.4	T1-111
20	山城国図	1 鋪	未詳	116.5×164.5	T1-80
21	紀伊国図	1 鋪	未詳	78.6×109.6	T1-107
22	近江国図	1 鋪	未詳	117.4×160.1	T1-66
23	越前国図	1 鋪	未詳	77.9×108.4	T1-63
24	三河国図	1 鋪	未詳	108.2×77.8	T1-48
25	安房国図	1 鋪	未詳	107.0×78.5	T1-74
26	下野国図	1 鋪	未詳	108.2×78.3	T1-70
27	出羽国図	1 鋪	未詳	119.2×163.9	T1-108
28	備前国九郡絵図	1 鋪	寛永年間(1624-1644)	193.4×188.5	T1-14
29	備中国絵図	1 鋪	寛永年間(1624-1644)	190.0×189.2	T1-30
30	池田輝政宛豊臣秀次朱印状	1 通	天正19年(1591) 8月20日	32.8×47.2	C9-45
31	池田光政宛徳川家光御内書	1 通	〔元和9年(1623)か〕5月晦日	46.8×65.4	C9-44
32	徳川家光一字書出状	1 通	元和9年(1623) 8月3日	46.5×66.4	C6-317
33	池田光政宛江戸幕府老中連署奉書	1 通	〔寛永16年(1639)〕9月11日	39.6×54.8	C9-41
34	池田光政宛江戸幕府老中連署奉書	1 通	〔慶安4年(1651)〕9月4日	40.8×56.3	C9-35
(参考)	日本大絵図	1 鋪	未詳	360.5×456.0	T10-4

■前期:11月10日(土)~18日(日)のみ展示 □後期:11月20日(火)~25日(日)のみ展示

## 池田家文庫絵図展

年度	展示テーマ	会期
平成9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日
平成10	岡山藩と海の道	1998年10月23日～11月1日
平成11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日
平成12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日
平成13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日
平成14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発(1)	2002年10月23日～11月1日
平成15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発(2)	2003年10月23日～11月1日
平成16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日
平成17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日
平成18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日
平成19	陸の道	2007年11月16日～12月2日
平成20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日
平成21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日
平成22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日
平成23	江戸時代の巨大手描き絵図 国絵図復元!	2011年10月22日～11月6日
平成24	日本六十余州図の世界	2012年11月10日～11月25日

## 記念講演会・パネルディスカッション

年度	記念講演会	記念講演会講師(役職は当時)	期日
平成9	絵図を読む	岡山大学文学部 教授 倉地克直	1997年10月25日
平成10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター 総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平成11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部 教授 千葉喬三	1999年10月23日
平成12	江戸幕府の国絵図事業	東亜大学 教授 川村博忠	2000年10月28日
平成13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所 教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平成14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部 教授 名合宏之	2002年10月26日
平成15	近世の境界争論と裁判	東京大学史料編纂所 助教授 杉本史子	2003年10月23日
平成16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム開設事務所 乗岡 実	2004年10月23日
平成17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部 教授 倉地克直	2005年10月1日
平成18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部 教授 高橋 修	2006年10月26日
平成19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館 館長 在間宣久	2007年11月23日
平成20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部 教授 池内 敏	2008年11月1日
平成21	儒教教育と武士の人間形成	京都大学教育学研究科 教授 辻本雅史	2009年10月3日
平成22	デジタルマップで廻る城下町	徳島大学大学院ソシオ・アーツ・サイエンス研究部 教授 平井松午	2010年11月20日
平成23	国絵図復元の成果	東京藝術大学大学院 准教授 荒井 経	2011年10月23日
平成24	徳川家光と日本	京都大学名誉教授 藤井譲治	2012年11月18日

年度	パネルディスカッション	パネラー・司会	期日
平成23	国絵図復活	東京大学史料編纂所 教授 杉本史子 東京藝術大学大学院 准教授 荒井 経 電気通信大学 准教授 佐藤賢一 筑波大学大学院 博士前期課程 中村裕美子 国絵図研究会 会員 青木充子 [司会] 東京大学大学院 准教授 中村雄祐	2011年10月23日

平成24年度 池田家文庫絵図展  
「日本六十余州図の世界」

発行日

平成24年11月10日

主 催

岡山大学附属図書館  
岡山シティミュージアム

発 行

岡山大学附属図書館  
〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

印 刷

株式会社中野コロタイプ



西

本作園七郡  
 英多 膳田 古田 吉田  
 久米 大庭 真嶋  
 高貳拾貳万七七百拾石  
 古八春并改在

連子河原

山崎